

脳梗塞急性期対応における検査迅速化の取り組み

t-PA モード 2 年間の分析

◎大城 佑馬¹⁾、田中 優磨¹⁾、花城 瑞姫¹⁾、宮城 由紀乃¹⁾、福留 直利¹⁾、高安 遼治²⁾、牧志 輝¹⁾、下地 淳一郎¹⁾
沖縄県立中部病院¹⁾、沖縄県立南部医療センター・こども医療センター²⁾

【はじめに】急性期脳梗塞において rt-PA（アルテプラゼ）の静注内投与を行うためには、迅速な検査結果が求められる。当院では 2023 年 4 月より、急性期脳梗塞患者の検体の対応（以下 t-PA モード）を運用開始した。今回、t-PA モード運用実績を振り返り 2 年間で得た成果と課題について報告する。

【t-PA モード運用】医師から t-PA モード対応の連絡を受けた後、検体到着時点で処理を開始する。t-PA 検体処理記録簿へは①日付②検体番号/患者 ID③担当技師④検体種別⑤検体搬入時間⑥BM 搭載時間⑦結果報告時間⑧結果報告技師⑨備考を記録する。全検査終了後、速やかに提出医へ連絡をする。検体到着から 30 分以内に全検査を完了し報告することを目標としている。

【方法】t-PA モード対応件数、30 分以内に報告できた件数、rt-PA が実際に投与された件数の調査を行った。

【結果】2023 年 4 月 16 日～2025 年 3 月 31 日までの期間で t-PA モードで対応した件数は 234 件であった。そのうち 145 件(62%)が 30 分以内に結果報告されていた。rt-PA

が投与された件数は 14 件であった。

【考察】結果報告時間の平均は 29 分であり、目標の 30 分に近いタイミングでの報告が概ね達成されていた。30 分超過群では平均結果報告時間が 36 分であった。特に検体到着から BM 搭載までの時間が 30 分以内群に比べて優位に長く（9 分、15 分、 $P<0.001$ ）、この工程が報告時間に大きく影響していることが示唆された。rt-PA が投与された件数は少数であったが、t-PA モード対応を行った患者には脳梗塞や脳出血など重症な疾患が多く含まれていた。

【まとめ】t-PA モードは急性期対応における検査体制の強化に寄与しており、30 分以内の報告が一定数確保できていることは意義深い。今後は特に検体搬入から測定開始までの時間短縮を中心に、作業工程の効率化や装置の運用改善や技師間の連携強化を図ることで、より高い報告達成率と質の高い急性期医療を実現することが期待される。

連絡先：098-973-4111（内線:2782）